

社説

雑居部屋で老いたくない

雑居部屋で老いたくない。これは、高齢者が暮らす環境を改善する必要があることを示している。高齢者は、健康な生活を営むために、適切な環境が必要である。雑居部屋は、高齢者にとって、生活の質を低下させる可能性がある。したがって、高齢者が老いたくないためには、適切な環境を提供することが重要である。

22年前の社説です

ゆき@あなたは 雑居部屋で 老いたいですか? (/o \)

大熊 由紀子

ある日東京に生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『物語・介護保険』（岩波書店）『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』『寝たきり老人のいる国いない国』『福祉が変わる医療が変わる』（ぶどう社）『患者の声を医療に生かす』（医学書院）など。国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム）。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係。http://www.yuki-enishi.com/の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバー読めます。

第86回

「雑居部屋で老いたくない」という社説を朝日新聞に書いたのは、22年前のことでした。抜粋してみます。

「習慣も、人生観も、寝起きの時間も、テレビ番組の好みも違う他人同士が、広いとはいえない部屋で四六時中顔つきあわせて暮らすのは、つらいことだろう。

イギリスの社会福祉施設運営基準は、こう記している。「1つの部屋に2人以上が生活する場合には『特別な理由』がなければならぬ。

西欧人と日本人では、雑居に対する文化が違うのだろうか。そんなことはないようだ。日本の施設の職員が最も頭を悩ますのは同室者の不仲の仲裁と部屋替えだ。施設に暮らす人びとの最も切実な願いは「個室に入りたい」ことだという。日本住宅会議の1988年版「住宅白書」は、こう、分析している。

「話し相手がほしくないのではない。サロンで話し合うのはよい。自室に客を招いて話すのも好きだ。しかし1人きりになれる部屋がまったくないのはつらいものだ。一時的に入院する病室や旅行中の相部屋ではない。永く住む住宅なのだ」と。

身の回りのことが自分ひとりではできない人は、特に深刻だ。自力で部屋から逃げ出すことができない。ひとには絶対見せたくないおむつ替えの姿や音やにおいが同室者に知れてしまう。誇りが傷つけられ

る。見せられる方もつらい。

関東弁護士連合会は、報告書「老人と人権」の中で、日本の施設について次のように述べている。

「プライバシーを侵害され、排せつ介助も同室者の面前で行わなければならないなど、到底、人間の尊厳を保持した『生活の場』相当のものとは言えない」

◆ありのままの自分に出逢える場◆

この社説、専門家からは散々でした。「雑居などと、人間性の悪い言葉は使わないでほしい。相部屋の方が、和気あいあいとして、いい。日本の老人の人情や文化は西洋とは違う。現場を知らない論説委員は困ったものだ」というのです。

孤立無縁の私に90年代の終わり、強い味方が続々現れました。8人ほどの個室と団欒の部屋を1つの生活単位にしたユニットケアが新築され始めたのです。

99年に秋田県鷹巣町の「ケアタウンたかのす」、00年には、千葉県八街市の「風の村」、岐阜県古川町の「飛騨寿楽苑」、滋賀県中主町の「あやめの里」、兵庫県尼崎市の「けま喜楽苑」……。

上の写真は、「ひとりひとりが輝く場です」「暮らす人、働く人、集う人で共に創る場です」「ありのままの自分に出逢える場です」という憲章をかかげた「風の村」での暮しです。自分の部屋をもつことで、

クイズに挑戦。えすと、何だっけ？



お花をいけて、お洒落して



朝は、まず鏡に向い、それから1日が始まります



団樂の部屋で、一句ひねって。



大好きな氷川きよしさんと一緒に



自慢の作品を展示して、記念撮影

それぞれが、実に個性的に輝いています。

◆神話だった「和気あこぎ」◆

最も強力な味方が、スウェーデンで博士号をとり、98年、京大教授になり02年、52歳で急逝した外山義さんです。「飛騨寿楽苑」の建て替え前と後とお年寄りがどう変わったかの比較研究で「神話」を覆したのです。

方法はこうです。お年寄りの顔を二人一人覚えた15人の学生がベンチに分散して静かに座り、1分間ごとに記録をとってゆきます。朝7時から夜7時まで、誰と誰がどのような会話を交わしたか記録します。

結果は、常識を覆すものでした。昼の8時間、10室中8室で最高2回しか会話がありませんでした。2回あったのが2室、1回が3室、会話のまったくなかった部屋が3室。3回以上の会話があった部屋も「お金がなくなった、あんたが盗ったたんだはないか」といったトラブルでした。

「どういう姿勢で、どちらを向いて、何をしているか」も同じ1分間スタディで観察してみました。窓側のベッドの人の80%が、他の5人と視線があわなないように背を向ける姿勢をとっていました。廊下側の人には67%が廊下を向いています。中央の人は97%が上を向いています。「和気あこぎ」どころではありません。

そして、改築後。お年寄りの行動は驚

くほど大きく変化しました。

口から食べる人が増えました。トイレの自立も進みました。残飯も半分が減りました。ベッドから離れ、互いの部屋を訪問するようになりました。同室の人に気をつかわずにすむので家族の訪問がぐんと増えました。そして、なにより、笑顔と会話が増えました。（詳しくは『物語・介護保険』を）このデータに勇気を得て、02年、政策変換に踏み切ったのが、厚生労働省老健局長で、いまは大阪大学大学院教授の堤修三さんでした。03年以後は、個室と団樂の部屋を組み合わせた「小規模生活単位型特別養護老人ホーム」、通称ユニットケアのみが建設を許されることになったのです。

◆そこに暗雲が。◆

ところが、民主政権になるや、暗雲が立ち込めています。「地域主権一括法」に、県の判断で貧しい人のための雑居部屋併設を可能にする項目が盛り込まれたのです。

地方分権の意味を取り違えたと思えませんか。

風の村の理事長、池田徹さんは、毎週3日は人工透析でベッドに横たわらなければならぬ身で、「特養をよくする特養の会」を立ち上げ、呼びかけました。危機感をもった人たちが、6月27日、「雑居部屋特養を許さない緊急集会」を開きます。結果は、のちの号で。